

握った手

坂口安吾

青空文庫

松夫はちかごろ考えすぎるようであった。大学を卒業して就職できたら綾子と結婚しようと考えた。以前はそうではなかった。かりそめの遊びの気持であったが、だんだんそうではなくなつて、必ず結婚しなければ、と考えるようになった。

彼が考えすぎるにはワケがあつた。松夫と綾子との出会いは甚だしく俗悪で詩趣に欠けているのである。ある映画館であつた。隣席の娘が愛くるしいので松夫は心が動いた。映画のラヴシーンと現実とが、一時的に高揚して、アツと思うヒマもなく隣席の娘の手を握つてしまつたのである。

松夫は美しいひとの顔をマトモに見ることができないような内気で、すすんで美女に話しかけるような芸当は望んでも得られぬことであつた。彼は内気を^{のろ}呟つていた。すすんで美女に話しかける勇気が欲しいということは彼のかねての願望で、その一ツの勇気によつて自分の人生に大転換が起るはずだがと考え、内気を呟つて味気ない日々^のに苦しんでいたのであつた。

その彼が見知らぬ娘の手を握つたのは、その時彼の魂がどこかへ抜け出ていたせいだ。多少の勇気も加味されていたかも知れぬが、要するに一期の不覚と申すべきものであつた。

しかるに娘がその手をきつく握り返したから、軽犯罪法のお世話に相成るべき不審の挙動が天下晴れての快拳と相成り、福は禍の門と云うが如くに禍根を残すこととなった。

松夫は一度だけこう云った覚えがある。

「君が隣席へ坐つた時からキレイな人だなアと思っていたのだよ。それで映画に亢奮する」とつい衝動的に握つちやつたんだ。君が握り返してくれた時にも、まだボンヤリしたままだったよ」

すると綾子も一度だけこう答えた。

「私もあなたが一目で好きになったのよ。フラフラツと隣へ坐つちやつたでしょう。見抜かれたみたいで口惜しかったわ。ヨタモノだと思つたわよ。でも、握り返しちやつたのよ。蓮ツ葉に思われるのが辛いわ」

この会話は一回きりである。二人の仲が深まり、遠慮がなくなるにつれて、このことだけにだけは再びふれなかつた。

綾子への情が深まるにつれて、松夫は彼女の握り返した手にこだわった。むろん先に握つた自分の手もイヤではあつたが、それはこの際問題ではない。綾子はあるような時、誰に対してもあのように応じるのではないかと思ひめぐらして苦しんだのである。

考えすぎるのはいけないことだ、とむろん彼も心得ていた。しかし、自然に考えてしまふものは仕方がない。これも愛情のせいなのだ。愛情が深まるにつれて、彼は綾子の握り返した手にこだわった。苦しみは日ましに深くなつたのである。

そもそも映画館で手を握つたという事の起りが俗悪すぎるのだ。考えれば考えるほど救いが無い。したがって、先に手を握つた自分の行為というものは思いだしても毛虫に肌を這われるような思いがするのであつたが、その不快さも綾子の握り返した手を考えると忘れてしまふ。それは不快さとはワケがちがう。不安なのだ。嫉妬でもあるし、恐怖でもある。

「蓮ツ葉に思われるのが辛いわ」と綾子は云つた。いかにも健全にきこえるが、思えば思うほど月並でもある。そもそもいかなる女でも、あのような仕儀の処理に際しては、そのように述懐するに相違ないように思われる。ということは、それがキマリ文句であるように、握られた手を握り返すということも、彼女らにとってオキマリの月並な行為にすぎないのではないか、ということだ。

「キミは男にソツと手を握られたとき、必ず握り返すんじゃないのかなア」
ということを何べん口走りそうになつたか知れない。しかし、松夫はタシナミを心得て

いたから、こればかりは云わなかった。袖の下を握りしめた政界の大物と同じように、秘密については口を割らないタシナミを心得ていたのである。

しかし彼は綾子に向ってそう問いかけた場合を空想することは毎日の例だった。彼が秘密の口を割らないのは彼女の痛いところにふれ彼女を苦しめるに至ることを厳に慎むからであったが、空想の中に於ては、彼女はむしろ彼に怒り彼を軽蔑するのである。ということとは、彼女がその秘密を月並に仕出かす女だからであり、それを彼が何より怖れていることがそもそも空想の起りだからであった。

「こうこだわるのは不健全だ」

と考えて想念を払うために努力するのを忘れたタメシはないのだが、日ましに想念に苦しむ時間が長くなった。そのアゲクに変なことが起ったのである。



大学の同級生に水木由子という女学生がいた。彼女が心理学に凝っているのは有名だったから、松夫も知っていた。彼女は寝ても覚めても人間の心について考えているらしく、

易者よりも手際よく人の心という心をズバリズバリと手玉にとるコンタンのように見受けられたのである。そのアゲクとして彼女はすでに天眼通の如くに胸の秘奥を見当てる力があるらしいと脅威する向きもあり、その反対に、彼女が心理学に凝ったのは心理学の名村先生に惚れてるせいにはすぎないと断定している向きもあった。名村先生は冥想的な美貌の紳士で、その講義には宗教的な催眠力がこもっていると見る向きもあり、水木由子はそのトリコにすぎないと断定するのである。水木由子は大学生になって二月目ぐらいに近眼でもなくせにロイド眼鏡をかけるようになった。そして眉の根に小ジワをよせてからでなければ物を云わないようになった。これも要するに、彼女は入学二ヶ月目に大学というフインキに催眠されたせいであり、彼女のトリコになりやすい天性を示すものだと言をなす者もいたのである。

松夫も水木由子のロイド眼鏡と眉の根に寄せる小ジワに興味をもっていった。松夫のような内気な人間は、物を乞うことが少い代りに甚だ人の悪い観察をしているものなのだ。彼女が政治に凝らないのは世のため人のため大助かりだなぞと考えた。ロイド眼鏡と小ジワと読書と冥想と人間観察の代りに、彼女がカバンをかかえて東奔西走し、あの街角この広場で絶叫する様を想像したのである。政界の大物に惚れたあげく、彼女の胸も政界の大物

と同じぐらいみるみるブクブクとふとる光景なども考えた。

しかしロイド眼鏡と小ジワを寄せなければ彼女はあどけない可愛い顔立ちであった。ロイド眼鏡をかけないうちから松夫は彼女の素顔に目をつけていた。松夫は伏目がちに暮しながら美人を見逃さない技能があった。水木由子がロイド眼鏡をかけた時には人一倍仰天した彼であったが、眼鏡も小ジワも板について読書と冥想と観察の虫のように殺氣横溢している今日この頃では、とうてい近づきたい存在としてサジを投げていたのである。

校外に小さな博物館と広い庭園があった。孤独と想念に疲れはてた松夫がその庭園に迷いこんで樹蔭のベンチに腰かけていると、植込みの向うに水木由子が芝生に腰を下して読書しているのに気がついた。植込みを取りのぞけば二人の距離は二間か三間の近さであった。水木由子が先にそこにいたのである。

むろん挨拶するような仲ではないから、彼女が知らないフリをして読書をつづけていることにフシギはなかつたが、彼女は彼の出現に気附いたのか気附かないのかと考えた。

「気附かないはずはない。いかに読書の虫にしても、若い女がそれほど男というものに冷淡のほすはない」

後から来た松夫が音もなく読書している彼女に気附かなかつたのにフシギはないが、そ

れでもやがて気がついている。想念のトリコとなつたウツロの目にもやがて彼女の存在は映じたのである。

「それとも彼女だけは超越した存在かな？ イヤイヤ……」

読書と瞑想と観察の殺気横溢している今日この頃の彼女には、あるいは人間観察も秘奥に達したかと伺われる威厳もあつて、松夫も若干脅威を感じることがあつたのである。それにしても、若い女が男から超越することができ得るであろうか。

「この女心理学者先生の手を握つたら、彼女は握り返すだろうか」

と松夫は考えた。ロイド眼鏡以前のあどけない素顔を思いだして彼女を甘く見る傾向もあつて、今日この頃の彼女の威厳に必ずしも全面降伏していたわけではなかつた。

彼女は心理学の達人である。してみれば彼女自身の心理に於ても人間として例外ではないだろう。自分という土台があつて、はじめて人の心も解ける道理だから。むしろその土台たる彼女自身は普通人の心理一般を最大の振幅に於て蔵しているのかも知れない。

「もしも女一般が握られた手を握り返すものなら、彼女もそうするにちがいない。そして彼女がそうしないとすれば、それは綾子だけが例外だということになりうる」その例外は困つたことだと松夫は思つた。しかし、もしもそうときまれば、もはや綾子に用はない。

綾子は忘るべきである。そしてこの可愛い女心理学者に乗り変えるべきである。松夫はこう考えたが、それは水木由子を甘く見たせいではなかった。水木由子に対する愛情がにわかにと溢れたせいだ。この唐突な愛情がどこからそもそも湧いてきたのか意外であったが、その瞬間に、彼は溢れた感情にモミクチャになっていたのであった。

彼女の手を握ってためしてみたいと思った。そこが映画館でないことを思いだすヒマはなかったのである。彼女の見ているのはラヴシーンでなくて心理学の本であることを考えるヒマもなかった。さすがに白昼の庭園であることだけは知覚していたからあたりには人影ありやなきやと見定めることは忘れなかった。突然彼は何かを押されて歩いていった。彼女の前で、彼女の姓をよんで帽子を脱いで一礼した。そして彼女に目を上げて彼を見るだけのヒマしか与えず、跪いて彼女の手を押え握りしめたのである。

「突然の失礼をお許し下さい。読書をさまたげて残念です。しかしボクはアナタを愛していました。そしてボクは突然こうするほかに方法を知らないような男ですから、悪く思わないで下さい」

「痛いわ。よして」

と水木由子は松夫の言葉には全くツリアイのとれないことを云った。そして片手で松夫

の手くびを握り、扉にはさんだ手を無理に抜きとるような真剣な作業に没頭しはじめたのである。松夫はかなりしばらく彼女の手を押えていた。彼女が予想外のことをやりだしたから、処置に窮したのである。押えているうちに、なんとかならないかと思つた。しかし彼女の作業が長い山の芋をムリにも引きぬくような無法な荒々しきになり、とうてい詩情のまじる余地がないと見てとつて手を離した。

彼女は本を拾つて、一足退いて立ち上つた。本と一しよにロイド眼鏡も外れて地上に落ちたのだが、もともと近視ではなかつたから眼鏡がなくても天下の大勢に変化はないらしく、眼鏡まで拾つている算段はつかなかつた様子であつた。

「見かけによらないわね。なんて強引なんでしょう」

水木由子は本を小脇に抱えて、男に押えつけられた手を自分で握りしめながら云つた。松夫には云うべき言葉もなかつたので、地上の眼鏡を拾いとり、彼女の眉の根のちようど小ジワのよる場所へかけてやつた。なぜなら彼女は後退するばかりで、それを受けとるために手を差しださなかつたからである。素直に眼鏡をかけさせてから、彼女は云つた。

「凶々しいわ。凶ぶとい人ね。あんなことをしてニヤニヤ笑っているのね」

こう怒られても仕方がなかつた。苦笑ともテレカクシともワケの分らぬ笑いが顔にから

んで放れないのだ。彼は笑いを咎められたので、笑いを隠すために凶太く出て見せなければならなかった。

「ボクたちは青春をたのしもうよ。キミの年齢で本の虫になるなんて、バカらしいよ」

冷静な声だった。彼は自分が意外にもフテブテしいのを、このときはじめて見たのである。彼はもう成行にまかせるばかりであった。そして、彼女を見つめて、言葉をつづけた。「キミはこのへんで本と眼鏡に袂^{べいべつ}別すべきじゃないか。キミの一生にとって、それはどうせ一時期のものにすぎないのじゃないか」

「そんなこと、どうして云えるのよ」

「待ちたまえ。キミ、コンパクト、持つてるね。貸してみたまえ」

彼はコンパクトを受けとると、鏡を彼女の顔にかざし、たったいま彼女にかけてやったばかりの眼鏡を再び取りはずした。

「これがキミの可愛いそして本当の素顔だよ。ね。眼鏡は余計ものなんだ。もう、この眼鏡はかけない方がいいと思うんだ」

「眼鏡だってアクセサリーの一ツだわ」

「キミには有害無益のアクセサリーだよ」

「趣味の問題よ」

「そう。しかし、キミの悪趣味だ」

「本当に、そう思う？」

「むろん。しかし、眼鏡はキミの自由にまかせろが」と眼鏡とコンパクトを彼女に返して、
「人の意見も一応耳に入れておきたまえ。ところで青春をたのしみましようという提案に
対する御返事は？」

「アナタのような悪人、はじめてよ」

「人生を割りきってるだけのことなんだ」

「割りきれる？ 人生が？」

「割りきるべきだよ。キミにも割りきることをすすめるね。で、キミの御返事は？」

「強引すぎるわ。私、混乱してるの。あしたここで御返事するわ。いまの時刻に」

水木由子は本や眼鏡やコンパクトを両手に持ったまま、身をひるがえして駆け去ったのである。

松夫は一時に春が訪れたような解放感に目マイがした。自分の所業があまりにも「偉大」であったことを身にしみて感じた。偉大な態度。偉大な言葉。

「オレは人生を割りきっているだけだ」とは、なんて壮大な言葉だろう。彼の今までの人生におよそ無縁な、そして、その瞬間まで思いもつかなかった言葉だ。オレの人生が割りきれたら、と今までどんなに切歯扼腕したか知れやしない。一瞬間に、突然別世界へ走りこんでいたのだ。その晩、彼は綾子とのアイビキの時に、かなりよそよそしい態度を示した。綾子は次第に不キゲンになった。

「もう私が好きじゃないんでしょ。そうでしょう」綾子は強引でワガママだった。受身なのは松夫なのだ。彼女に高飛車にきめつけられると、松夫はヘドモドしてしまふ。グツと踏みこたえて偉大な威厳を見せることは、彼女に対してはもう不可能なのである。彼が彼女に威厳を見せる手段と云えば、彼の方から別れようと云いだすぐらいのものだが、それが云えるぐらいなら苦労はしない。ジツと睨んでいる綾子から目をそらして、松夫は細い声で答えた。

「卒業試験も近づいたし、就職試験の結果はまずいし、とても毎日がつらいんだ」

「アナタなんか、二三年落第した方がいいわよ。学校を卒業してみたって、おぼつかないわよ」

事務員の綾子は松夫よりもお金持であった。松夫の方がおごられる率が多いので、総て

にヒケ目を感じてしまうのである。その一夜、松夫は胸の中でこう呟きつづけた。
「オレに必要なのは革命だ。偉大な革命！ 今日行われたあの革命。あの解放感！ オレにだって、いろいろなことが、できるのだ」



翌日、彼はわざと三十分ほど時刻におくれて校外の庭園におもむいた。宮本武蔵の故智にならったのである。そして、これが自分の真剣勝負だと考えた。水木由子と自分ではなく、自分と自分の未来との生き方を決する真剣勝負だと考えた。これに勝てば自分の未来に勝つことができると考えたのである。

松夫はアレコレと多くのことを考えていた。たとえば、水木由子はもう今日からはロイド眼鏡をかけないだろうと考えた。それは水木由子が彼の革命に参加したシルシなのである。そして二人はともに解放の喜びにひたる。つまり、植込みの蔭にロイド眼鏡をかけていない水木由子が待つていたなら、すでに真剣勝負は彼の勝に決しているのだ。

しかし、水木由子がまだ眼鏡を捨てることを知らずに彼を待っていたなら、それはたぶ

ん彼女の心がその素顔と同じようにまだ稚いせいだろう。彼女は書齋の恋愛心理に通じていても、実地の真剣勝負にはうといのである。その稚さは、革命家にとっても、むしろ慈しむべきであろう。そして、その場合には、当然彼の手がその眼鏡を取り除いてやるべきであるが、眼鏡を投げ捨てて踏みくたくべきか、静かに彼女の手に戻して理をジュンジュンと説くべきであるか、彼はいまだに迷っていた。むしろそれは成行きにまかせようと考えていた。しかし、樹蔭のベンチのところへ来てみると、そこに腰かけているのは見知らぬ男女の学生であった。そして、植込みの向うの芝生には誰の姿もなかった。

彼女の代りに、彼が芝生に腰を下した。そして、彼女の残した目ジルシが何かないかと探してみたが、彼女がそこにいたという形跡を認めることはできなかった。

「アイビキと剣術の決闘をゴツちやに考えたのはマチガイだったか。革命、真剣勝負という自分の一存にこだわりすぎて、心理学の常道を逸脱したウラミがあるかも知れない」と彼ははじめて気がついた。剣術の決闘だから相手を待っているが、恋愛は汽車と同じように人を待たないのかも知れない。

しかし、彼は根気よく三十分ほどジツと待った。それから庭園内をぐるぐる探し廻って元の位置へ戻ってみたが、どこにも水木由子を認めることはできなかった。

しかし、革命はまだ終らない、と彼は根気よく考えた。彼は学校へ戻った。そして、広い校内を彼女の姿を探して歩いた。どこにも彼女の姿は見当らない。その翌日も、またその翌日も、彼女にめぐり会うことはできなかつた。彼の革命の意気ごみはにわかには衰えた。一夜ごとに半分ずつしぼんだあげく、三日すぎるとマイナスの方に傾いて、彼女にめぐり会うことの怖しさのために学校へ行くことができなくなつてしまつた。

水木由子の手を握つた自分の手がケダモノの手のように考えられる。思いだすと赤面せずにはいられない。そして、思いだすことが怖しくて、その怯えだけで冷汗をかいた。水木由子は扉にはさんだ手をひきぬくような真剣さで抵抗した。ついには彼女自身の手を土の中の山の芋のようにゾンザイに扱つて、無法に荒々しくひっこぬこうと努力したのである。それが彼女の彼に対する正しい気持であつたに相違ない。要するに彼はケダモノにすぎないのだ。アイビキの約束はケダモノの目をそらすために投げられたエサにすぎなかつたのであろう。ケダモノが見た革命の幻覚ほど愚かにもアサハ力なものはない。

松夫は握り返した綾子の手を考えることもできなくなつた。なぜなら、それを考えると、水木由子の手を握つた自分の手、ケダモノの手を思いださなければならぬからである。

彼は改めて綾子すらも一まわり怖いものに見直すようになった。彼自身の見ているも

のが概ねケダモノの甘い幻覚にすぎないのではないかという劣等感に憑かれてしまったからである。

「アナタ、ちかごろ気がぬけたみたいよ。時々フツと消えてしまうみたいよ。ふりむけばちゃんといえるでしょう。つまり、アナタ、しょっちゅう放心してるんだわ」

「そうでもないです。就職もダメだし、試験もダメらしい。気がめいることが多いので、ついね」彼は仕方なしにヘラヘラ笑って答える。自然に敬語で答えていたりするのである。綾子はその変化に容赦しなかった。

「変に卑屈だわね。全然三下って感じ。どこにも取柄がないみたいよ」

「つまり、たしかに、三下なんだ」

「赤くなつちやつたじやないの。いくらか羞しいの？ 怒ったの？ どっち？」

「習慣的にすぎないです」

「こまった人ね。でも、いいわ。私、三下って、わりと好きなのよ」

「親分は？」

「むろん好きよ。でもね。親分には甘えたいわ。可愛がってもらいたいのよ。親分のオメカケ」綾子はいつも彼をハラハラさせた。彼の手の中からいつでも降り落ちそうな感じだ。

彼女が会社のボスのオメカケにならないのはなぜだろうか。会社のボスが堅造なのか、彼女に腕がないのかと松夫は嫉妬した。

むろん綾子は口ほどではなかった。彼女は健全な良妻になりたがっているのである。ただ、松夫の良妻になりたいかどうかが問題なのだ。彼女の話ぶりでは、松夫の人格は認められていないようであった。

「アナタは二三年落第した方がいいのよ。学生にはアルバイトってこともあるし、人目も寛大だけど、卒業するとそうはいかないわよ」

「どうせ卒業できないよ」

「そう思うからダメなのよ。こう考えるのよ。永遠の大学生。ステキじゃない」

「永遠の三下と同じ意味だね」

「よく知ってるわね。悪い方、悪い方へ智恵がまわりすぎるのね。人生は表現の問題だね。明るく生きよ。詩に生きよ」

「永遠の大学生が詩なんだね」

「詩的表現。永遠の三下が現実かも知れないけど、気の持ちようでもなるもんよ」
「ボクは、しかし、学校を卒業して、就職できて、キミと結婚したいんだ。それが偽らぬ

ボクの気持だけど……」

「はやまるのは身の破滅よ」

「はやまるわけじゃないよ。すでに学校を卒業して就職する時期に来てるんだもの」

「だって、落第するでしょう」

「しないかも知れないよ」

「就職できないでしょう」

「だから、あせっているのさ」

「ムダだわね。私はアナタが学生だから恋したのかも知れないわよ」

「それはキミの本心かい」

「本心で、なにさ」

「ボクを永遠の大学生にしたいのかなア」

「そうよ。それが好きなのよ。でもね。来年もいまの気持とは限らないでしょ。だから、本心って言葉は無理みたいね。いまの心。いまだけよ」

落第すれば、まだ当分は脈があるらしい様子でもあった。松夫はもう二度と誰とも恋ができないような予感がして仕方がなかった。最近に至って特にそうだ。早い話が、彼はも

はや誰の手を握る勇氣も起るまい。誰に話しかけることもできない。目を上げる勇氣すらもない。恋し得た最後の女、そして結局一生に一人の女が綾子のような気がする。完全だの純粹などという愛や恋のことではなく、あらゆる打算のあげくが、この女一人、である。最後の一文という乞食の愛情である。赤貧のドン底だ。無一物。ギリギリのたった一ツ。それにしては綾子は美人だ。映画館で拾った女のようにではなかった。それだけに胸が痛む。今にして思えば、映画館で拾われたのは松夫の方であった。拾われるのも、これが最後であろう。どうしても綾子を放せない気持が強まるばかりであったが、その気持を強く押しつける勇氣は衰える一方だ。自分の中にかなる実力の存在も信じることができなくなつてしまつたからである。たった一日の革命以来、急速度に没落してしまつたのである。



試験のとき、松夫はしばしば水木由子と顔を合わせなければならなかつた。水木由子は平然としていたが、松夫はいつも急いで目をそらして心の中では宙をふむほどオドオドしなければならなかつた。むろん水木由子はロイド眼鏡をかけていたが、その眼鏡が鋼鉄の

兵器のようにすさまじい力で彼を圧倒した。彼はそれに怯えた。そして、その眼鏡から聯想しなければならぬのは自分のケダモノの手だ。そのために一そう眼鏡に怯えてしまう。鋼鉄の兵器に狙われた一匹のケダモノのように身も心もすくんでしまうのだ。

松夫の最後の試験の日、その試験のあとで偶然水木由子にすれちがった。彼女は一人であった。あたりには人がいなかった。彼が落第しても水木由子は卒業するに相違ないから、これが彼女の見おさめであろう。彼女が一人で、またあたりにも人影がないのを見ると、松夫はこの機会にケダモノの手を拭き消したいということをもふと思いついた。ケダモノの手の怯えは彼の堪え難いものだった。生きる限りこの手と共にいなければならないという事実ほど絶望的なものはなかったのである。

松夫は水木由子に追いついて、よびとめた。脱帽すると、彼の頭も額も汗でいっぱい、それは益々無際限に溢れたって湯気をふいた。赤面してオドオドし、いまにも卒倒しそうな様子である。革命時の颯爽たる武者ぶりにひきかえ、あまりにもサンタンたる有様であるから、水木由子は落ちついて上から下まで彼を觀察する余裕を得ることができた。

「ボクのケダモノの手について、お詫びしておきたかったです。たぶん、お目にかかるのはこれが最後でしょうから、この機会を逃すと、ボクは一生、ケダモノの手に苦しみな

ければならないのです」

「ケダモノの手？」

「そうです。それがボクの表現です。いえ、ボクの実感なんです。そのために苦しんでいます。その苦しみはいまアナタにお詫びして許していただくことができても消えないかも知れませんが、この機会にお詫びせずにいられなかったのです。ボクはアナタの手を握ったことで苦しんでいます。そのボクの手が毛だらけのケダモノの手に見えるのです。これほど絶望的なことはありません」

水木由子のロイド眼鏡に筋金がいってピンとはりきったような感じがした。つまり松夫の話の途中から、彼女は女ではなくなつて、心理学者に變つたのである。眼は学者のものになりロイド眼鏡と一つになつてケンピ鏡のように冷徹に哀れな生物を観察しはじめたのである。

「いつから、そう見えるんですか」

「アナタの手を握つた翌日か、翌々日ぐらいからです。ボクは翌日約束の場所——いえ、アナタがケダモノをだますために仰おっしゃ有つたのですが、ボクはその場所へ行きましてアナタの姿が見えないので、それで次第に自分がケダモノにすぎないということに気がついた

のですが、しかし、ボクは誰に対しても再びあのような失礼は犯さないつもりです。しかし、アナタの手を握ったケダモノの手はあの時以来、また永遠に消えないのです。こうして、お詫びしても消えないかも知れません」

「目に見えるのですか」

「まさか。ボクは狂人ではないのです。幻視ではありませんよ。ただ思いだすと、すぐむのです。絶望するのです」

「狂人ではないと思いますか」

「むろん、そうです。ボクは平凡な、むしろ無能者にちかい平凡人です。もう悪いことすらできないような無能者なんです。ですから、せめて罪のお詫びだけしておきたかったのです」

「ずいぶん汗がでていますね。駆けたんですか」

「いえ。お詫びしたいために、こんな風に汗がでてくるのです。つまり、それほど、ケダモノの手に苦しんでいるのでしょうかね」

婦人科学者は分りましたというようにうなずいた。そしてしばらく考えている様子であった。観察が終ったせいか、ケンビ鏡の筋金がほぐれて、ロイド眼鏡にいくらか女の情感

がこもってきたようであった。水木由子は顔を和げた。そして女医サンが子供の患者にさ
とすようにやさしく云った。

「アナタの手はケダモノの手じやなかったわ。とても立派な男の手だったのよ。だから私、
手クビの痛いのが、とてもうれしかったわ。あくる朝、目がさめてからも、まだ痛いでは
よう。うれしかったのよ。うっとり、手の痛みを味わったのよ」

「許して下さいるんですね」

「むろんですとも。もともと怒っていないのですもの。うっとりさせて下さったのですも
の、感謝こそすれ、怒るはずないでしょう」

「慰めて下さって、うれしいです」

「アナタ、もつと強く生きなければダメよ。クヨクヨと思いめぐらしたって、人生はひら
かれないわ。叩けよ、開かれん、というでしょう。その叩く手がケダモノの手のはずない
でしょうね。叩く手は乱暴よ。人生をひらくんですもの。でもケダモノの手じやないわ、
立派な手よ。人間の立派な手」

「御教訓、身にします」

「もう本当にお別れね。お身体、御大事になさいね。もうみんな済んだことですから気軽

に云えるけど、私あの日、約束の時刻にお待ちしてたのよ。眼鏡を外してアナタをお待ちしてたのよ。アナタの遅れたのがいけないのだけ。縁がなかったのね、でも、それがよかったのよ。もう、みんな、すんだことですよ。もう取り返せないことよ。でもね。手クビの痛み、忘れないわ。御大事にね」

水木由子は静かに去ったのである。

松夫は叩けよ開かれんの教訓にしたがい、学校から水木由子の住所をきいて求愛の手紙をだしたが返事はこなかった。もう取り返せないことよ、という彼女の言葉が教訓以上の真実だったようだ。縁がなくてよかったわ、という彼女の言葉も。

青空文庫情報

底本：「坂口安吾全集 14」筑摩書房

1999（平成11）年6月20日初版第1刷発行

底本の親本：「別冊小説新潮 第八卷第六号」

1954（昭和29）年4月15日発行

初出：「別冊小説新潮 第八卷第六号」

1954（昭和29）年4月15日発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：tatsuki

校正：noriko saito

2009年3月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

握った手

坂口安吾

2020年 7月17日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>